

1988 (昭和63) 年春、石野康弘は大阪学院大に進学した。運命の出会いには、キャンパスの外に待ち受けていた。大阪・吹田市にある大学の目の前に、「ラーメン大王」という店があった。アル

バイト先となったその店を経営する「永大安」の社長・岡田國男(当時45)こそが、石野にとって人生の師となる男であった。

15歳で料理の道に入り、独立して一國一城の主となった岡田に石野はあこがれた。岡田も一介のアルバイトに過ぎない石野を重用し、店長格として扱った。「戦国時代に生まれて、この人のために死ねたら幸せやろうなあ」。本気でそう思った。授業が終われば、バレーボール。部活動の後は午後7時から翌午前3時までラーメン大王でアルバイト。忙しい日々の疲

れは、岡田に会えば吹き飛んだ。「社長のために働きたい」。4年生になった石野は、永大安への就職を希望するようになった。

「厳しく温かく」

ラーメン店4件を営む岡田は料理人らしく、経営者でありながら積極的に厨房に入った。がっちりした体にパンチパーマといういかつい風貌そのままに、気に食わ

ないことがあれば、烈火のごとくしかり飛ばした。しかし、どこまでも温かく、懐の深い男でもあった。

「ラーメン道に入門 人生の師と出会う」

ラーメン道に入門 人生の師と出会う

しかし、世間知らずの自分が岡田の役に立てるかどうか、今ひとつ自信が持てないのも事実だった。

た。石野はいったん「普通の社会」を経験してから岡田の元に馳せ参じようと、富山市内の薬品会社に就職した。

父・亮三と母・三ツ子は「お前なんか帰ってくるな」と怒った。石野は詰め込んでポンコツの車に乗り込んだ。行く当てはもちろん、ラーメン大王だった。

2カ月で脱サラ

岡田は石野を受け入れてくれた。結局、石野は永大安に入社し、店の近くに家賃1万5千円のアパートを借り、ごみ捨て場で家具を拾い集めて新生活を始めた。この時、全財産は2640円。「自分の店を持つまで絶対に家には帰らんぞ」。これぞ自分で選んだ道である。石野は独立の野望に燃え、本当の意味で人生のスタートを切った。

石野(左端)の師匠・岡田(右)と長男で親友の貴行。今でも月に1度は大阪で食事する。今月、東大阪市内



案の定、サラリーマンは性に合わなかった。先輩や上司が未来の自分に見えてしまうのだ。将来が予測できる仕事に、やりがいを感じられない。何より、出世して両親や岡田に恩返しするには、時間がかかりすぎる。「このままじゃダメや。レールは自分で敷かんといかん」。入社わずか2カ月後、石野は誰にも相談せず辞表を出した。

安定した生活を送ってくれるものと安心していい